東海道行脚(三)

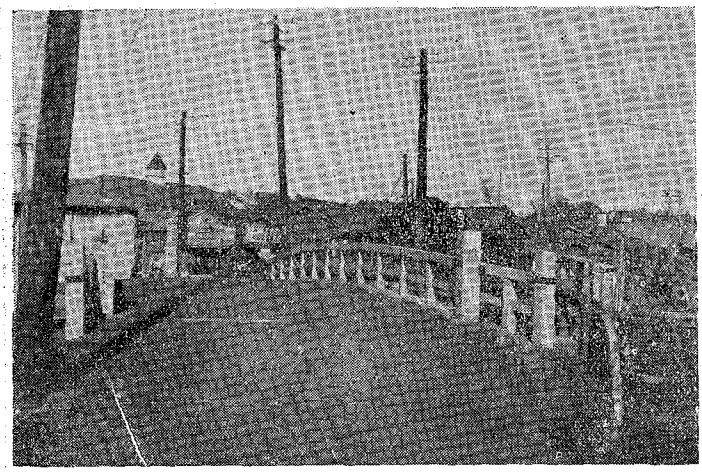
田中　好

○

神奈川から西へ、青木町や淺間町を經て保土ケ谷に出たのが德川時代の東海道であつた。それ以前の東海道も德川時代と餘り違ひは無いが、山下町から神明社の東側を通つて、今の惟子橋の上流一町位北の方に出てゐたのだ、今は見る影もない程交通閑散な市道だ、我が國歐風繪畫の先唱者――司馬江漢が天明八年西遊したとき、蕎麥を喰つて知人河内屋善三郎から長崎までの旅を疑はれて『伊豆熱海に湯治して江戸へおかへり』と言はれた神奈川の臺の茶屋、

今は昔の跡方もないが、いま巡査の交番所のある附近ださうな、昔の故事に無頓着な顏して巡査が立番してゐる。私の旅は、ヨーしたこころを見るのが樂だ。

澤山な昔物語りを持つ此處、東海道も大正の御代、道路法の施行によつて其の資格を失つた。夫れこ言ふのも開港當時は百戸にも足らなかつた横濱村――今の横濱市が十二萬こ呼ふやうになつた發展振りに引きつけられて、由緒のある東海道を横濱の都心に移さうこ言ふ近代的役人の、新らしがらせの根性に禍されたのだ、高島、平沼、鹽田の各町を通つて保土ケ谷に出るのが、今の東海道なのだ、が、しかし其處には國道の路線ばかりでまだ道が無い、都市計畫こ言ふ近代的の名に依つて十五間幅の道路を開設してゐる。



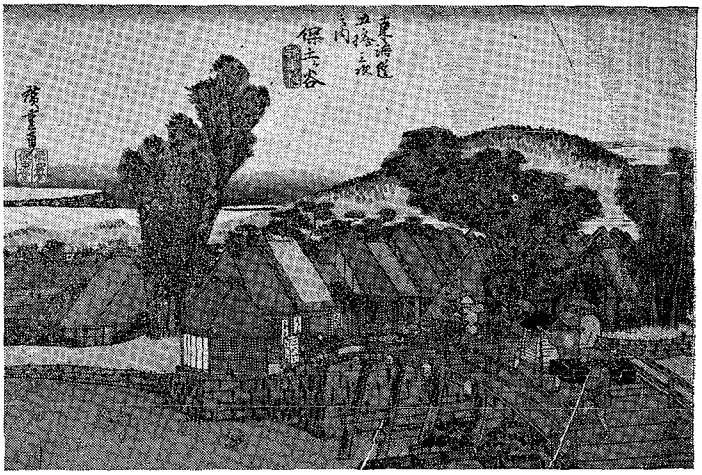
現在の保土ケ谷

保土ケ谷

昔の程谷――今の保土ケ谷町、昭和二年に横濱市に編入されたが、夫れでも永祿の頃は惟子宿こ言はれて、參勤交代のときに驛宿の役目を勤めたものだ、併呑した横濱よりは、我が交通に貢献した功勞のある獨立宿驛だ、昔を物語る功勞者――惟子橋も、ドーセ近い内に捨てらるゝものこ評價されたのか、木橋のまゝに、朽ちはつるまゝに捨てられてゐる、橋の靈魂よ、橋の資格を失ふのはさぞ殘念だらうが、お前の架つてゐる道は鐵道東海道線こ平面交叉――和合したり、屈曲が餘り

に多過ぎる。近代交通の爲には直線道路が必要なので捨てられるのぢや、時運の推移と諦らめるが可い。

町端れで國道が北折する所からは、まだ横濱にも餘り數の尠ない十間幅の道路に仕立てられ、歩車道の區別さへして近代道路に構築されてゐる、その筈だ、昔の宿驛奉行の家も和洋折衷の家となつてゐる、保土ケ谷地籍の東海道は東と西の端だけが近代的道路なのだ、頭を隠して尻を現すのが現代的だのに、此處、保土ケ谷は反時代的だ、が併し、反時代的になつた驛を話さなければ判らない、コーだ、あの恐ろしい大正の大震災に、此處保土ケ谷の町家は、火災を免れたが道沿に立ち並んでゐた町家は過半倒れて終つたので、幸か不幸か夫れを機會に舊東海道の道幅を擴張したのぢや、家は倒れる屋敷地は道に取られる、泣き面に蜂のやうなもので其の計畫には隨分批難もあつた、當時の長官安河内老などは、餘り大膽な計畫に夫れを策した土木課長の高田景君を叱り飛ばした、大原の庄助さんを踊つてゐる高田君でも、その時ばかりは、庄助さんのやつに朝寢朝酒ナンテ言つてゐられなかつたらしい、何でも辭表を懐にして折角目論んだ仕事の援助を内務省に泣き附いた、好漢、高田君に泣き附かれた内務省も、其の誠意に動かされて折角大藏省が是認した砂防費の一部をさいて、此處、道路の改良に補助したから出來上がつたのぢ

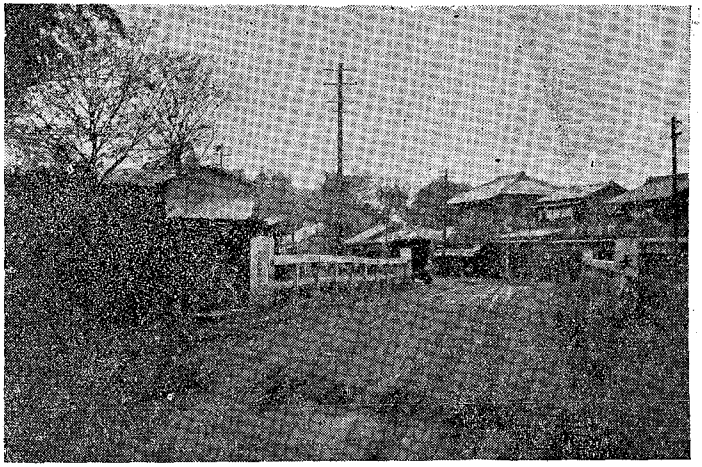


往昔の保土ケ谷

や、いま東海道に旅するものは、震害地道路改良事業として擴張された、此處保土ケ谷やら戸塚、藤澤、茅ケ崎、國府津や小田原の町内で近代的に改良された國道を觀る、イヤ通ることの出來るやうになつたのは、高田君のお蔭であることを、夢、忘れてはならぬ。

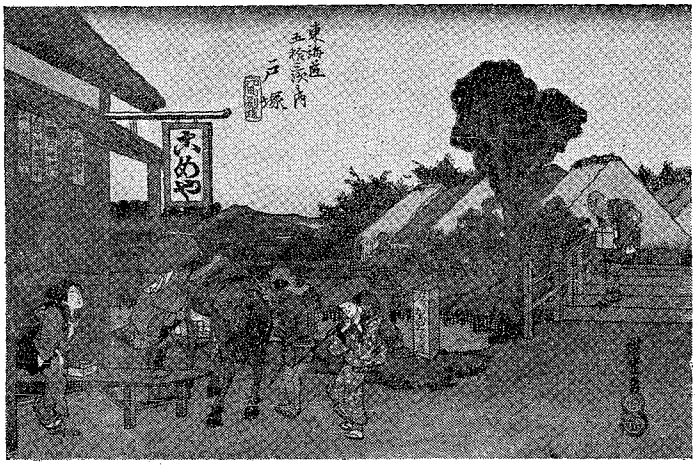
保土ケ谷の町外れになると、德川氏三百年の昔を物語つてゐる並木、老松が今も路側に聳えてゐて、長明が東海道記で賞めたやうに、松に雅琴の調あり、と言つたやうだ、鐵道東海道線と相對峙して鐵道よ、お前は俺の方が昔から陸上交通の覇者であつたと威張つてゐるやうだ。

並木外れから右に幅二間位の道路がある、夫れが德川時代の東海道だ、有名な權太坂、松林の中にある勾配十分の一位な坂路、今は誰れ通る人もない、『玉くしげ』二つに分る國境、所かはれば品の坂より、と彌次さんがやつた品野坂、夫れも明治の御代に山谷の方に變更されて終つた、昔の東海道は里人の通行するだけだ、岡部日記で眞淵が、『田の上山もこなごに濁りたる水いと高きは、此處にしも甚だしく降りにけるなり。』と言つてゐるが、雨も降らない時でも道は昔と同じ泥土だ併し新國道は武相兩州の境に坂路があるだけで四間幅に仕立てられた立派な道だ。



現在の戸塚

戸塚――昔は富塚と言つたとは相模風土記が錄してゐる、戸塚目附け場の舊跡は、町の入口道の兩側に淋しげに立ち並んでゐる、一里塚の舊跡を語る一本榎やら、德川家康、入國のとき五太夫が架けたと言ふ五太夫橋やらが、昔を語つてゐるやうだ、正保年間に設けられた宿驛だけに古びてゐるが、例の大正震災に動機して昔の東海道は九間幅に擴張されてゐる、今の人に言はすと擴張前の道路は幅二間五分であつたと言つてゐるが、相模風土記に依ると『道海道東西ニ貫ク幅凡四間許』と錄してゐるから後世人が道敷を領得したのだらう。



往昔の戸塚

九間幅の道に擴張されたのは結構だが、町の央で鐵道東海道線が横切つてゐる、そこ東海道線踏切は昔のやうに幅三間足らずだ、踏切の前や後の道幅を擴張して二車線や三車線道路にした處が、鐵道踏切で交通を沮まれてゐては折角の擴張も餘りきゝ目が無い此の踏切を擴張するには數萬圓の金を出さねば鐵道省の役人が承知しない、夫れと言つて縣に出すだけの資力がないから放つてあるのだ、東海道線鐵道が敷かれて何年になるか判らないが、ロハで道路を占用してゐながら二間や三間の擴張に數萬圓を要求するのは餘りに陸上交通に無自覺だ、夫れであるから陸運行政を鐵道省の所管に移したくないのだ。夫れ汽車が來た、お前道路の交通は引下れ、道路は俺の厄介物だと、養子が財産を領得して養母

を虐待してゐる格だ。

歸家日記の孝標が女は、女旅路の不安さに益本から戸さしよく固めよなど言はれて、されど今正しき道の末こほりて武藏野の草ふす風枝をならさず、よつの海靜に治まれる折なれば白浪のたちよるべき恐もなし、と呑氣なことを言つてゐるが、元和年間と違つて昭和の御代に人殺し踏切のあるのは、恐ろしいとも恐ろしい。

町はづれから西へ、兩側に並木が聳えてゐる、東海道驛路の鈴の筆者は、原宿此邊より藤澤までの並木は杉なり、と言つてゐるが、今は矢張り松が大部を占め間々杉がある。寶永年代には杉であつたらう。今も松よりは杉が古いやうだ。一番坂二番坂と言はれた坂路も今は見る影も形もない、矢張り賀茂眞淵のやうに鮪の話し位をして通行するに相應はしい。

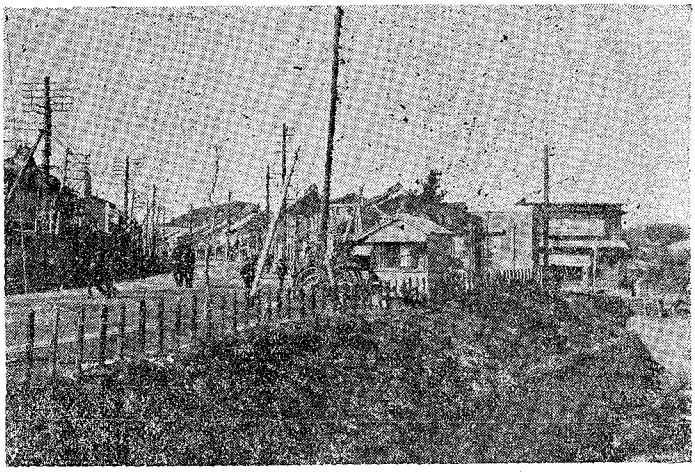
藤澤

町の入口には大鋸坂が頑張つてゐる、元弘年間のやうに新田義貞が鎌倉を攻める時には間に合つたであらうが、いま昭和の時代には不用イヤ交通の厄介物だ、坂の側に遊行四世の僧、呑海が創立したと言はれてゐる清淨光寺がある、昔は藤澤の道場と言はれて旅する者は一度は訪ねたものと見える、文明十八年の廻國雜記でも、こゝで茶の接待を受けて、澤水もかげは千いろの木の葉かな。紫のいろのゆかりのふぢさはに、むかへの雲をまつぞ木高き。なぞと詠んでゐる。大正の震災は無遠慮に此名刹を倒したが、天神のいたづらまだ飽き足らぬか、近く夫れを燒いて終つた。今は物哀れにも鐘樓がステーに支へられて地震の當時を忍ばせてゐる。

境内長生院に小栗重滿と照姫の墓がある、應永の始め常陸の國小栗の城主小栗孫五郎滿重、鎌倉幕府に謀叛するよし讒言されて、幕府の追討を受けたが、籠城かなはず出商人に假裝して三河國に落行くとき、こゝ藤澤で强盜横山某の家に宿つたのが不運、酒に鳩毒の入れたものを薦められて毒殺の計にかゝつた、ところが照手と言ふ妓女の知らせに依つて滿重だけは呑まなかつたが郎等十人は即死した、遊行十四代の大空上人のお蔭で滿重だけは遊行寺につれ行

かれ、事無く紀州に送られ熊野の溫泉で快復したので、京都へ訴へ出て謀叛違心のなかつたことが判つて、本領を受くることと爲つて常陸國に歸る道すがら强盜の一族を征服し、不運に泣いてゐた照姫を搜して濃州から迎へ謝恩した、因果應報の昔物語、子息小次郎助重追孝謝恩の爲に建てたと言ふ石碑が夫れである。

宿驛と爲つたのは何年頃か判らない。應長年間此處藤澤から程谷宿へ繼送つたことが古書にあると風土記は錄してゐる、相當古い宿驛であらう。京から鎌倉へ行くのは此處から分れるのだ、今は笛田を通つてゐる府縣道藤澤鎌倉線に依るのであるが、鎌倉時代の東海道は片瀨や七里ケ濱を通つて鎌倉に行つたものだ、彌次さん喜多さんも鎌倉道を敎へてゐるのは此處だ、相模風土記は東海道の道幅三間或は五間と言つてゐる相當なものであつたらうが、今は震災地道路改良のお蔭で九間半の幅に擴張され歩道なぞはペーブされてゐる。



現在の藤澤

夫れから先きは坦々たる道だ、明治になつて開けた辻堂や茅ケ崎、餘りに昔を語るだけの歷史を持たない、東海道に附着してゐるのか、夫れとも東海道が附着してゐるのか判らないが、東海道と言ふと富士山を思ひ出さずに居られない、その富士山は東下りには左に、江戸から京へ上るときは右に見えるのが原則ぢや、が、しかし茅ケ崎の町はずれになると其の原則を破つ

て左に富士が見える、之を今様左富士とても言つて可い。

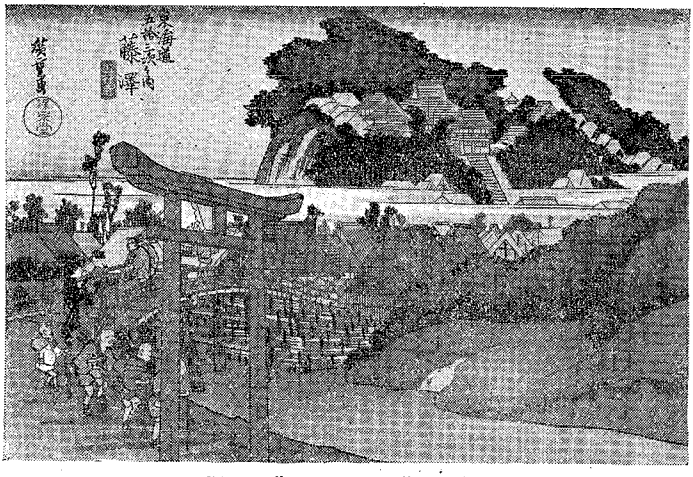
○

川の名を問へば渡しこばかりにて

入が馬入の人のあいさつ。

今は立派な鐵筋混凝土の馬入橋、長さ三百四十間で幅二十八尺、近代的の大橋で、大正十五年度に架けられたものだ。古い東海道を檢べて見たい私の旅には不釣合のやうな氣もする。

昔は今の橋のある所に渡船があつたのではなかつた。大正の大震災は馬入橋の爲めに大きなショックを與へた、夫れは高座郡茅ケ崎町の内下町と言ふ所の田圃の中から、丸太の古い橋脚が現はれたことだ、橋脚が飛び上つたのか夫れとも地殼が低下したのか判らないが、地表二三尺から四五尺位まで現はれた、夫れが疑ふこともない馬入川橋の舊跡だ、今は史蹟名勝天然物保存法とやら言ふ長い名の法律に依つて指定されてゐる。



往昔の藤澤

さうすると建久九年、武藏國稻毛の城主稻毛重成が、其の妻頼朝の夫人政子の妹であつた、北條時政の女の死んだ供養にかけた橋は此處なのだ、詰り相模川は出水毎に流心が變つて西へ移つたのであらう。

重成が架橋するまでは橋はなかつたが、今の愛甲郡の依知と高座郡の當麻とに浮橋を設けて交通したと言ふことだ、さうすると鎌倉以前の東海道は今よりは遙か北

の方を通つてゐたのだ、岡部日記でもその昔に想倒したものか、古の道はいと北の方なれば、北の水上や武藏相模の境ならん、菅原孝標が女の日記に在五中將の「いざ言問はん」と詠みける所は、武藏相模の境の川なるやうにぞ有る。と言つて寛仁年代の更科日記を物語つてゐる、その後東海道は南の方に移つたものか、鎌倉開府の後は、懷島――今の高座郡鶴嶺と茅ヶ崎に渡船場を設けて交通したものぢや、詰り今の今宿に渡船場があつたのだ。

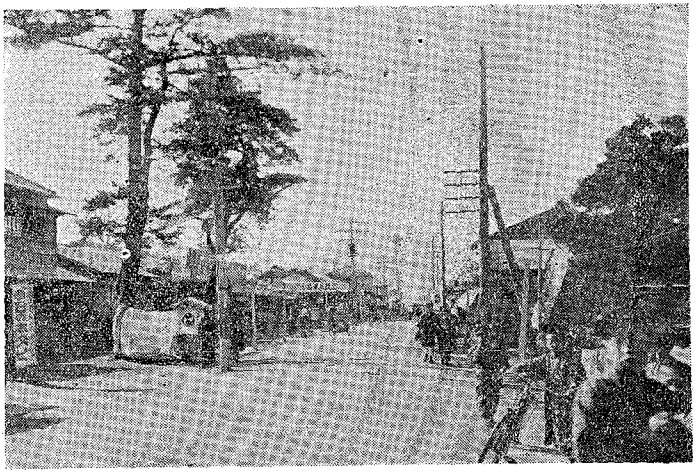
重成架橋の動機は、今人のやうに財產の私占を能事とするのと雲泥の差だ、妻を失つた重成は剃髮して入道となつたが、千部萬部のお經を讀むよりは、一人二人の命を助くるのが、せめて亡き妻の爲に此上もない供養だ、相模川は京都へ通ずる行路に方つて、諸人の通行が多いのに、渡船屢屢難破して人命を失ふことの多いのは、人の世の爲ではないと言つて賴朝に乞ふて橋を架けたのだ、死んだ妻の墓前に澤山の生花を供へたり、放鳥してみたり自動車の行列で權偉を示すと言ふやうな今人は、古人の此德に敬意を表して少しは道路の改善に盡しても可い筈だ。

東海道驛路の鈴の筆者は、架橋なつて式のとき賴朝殿出御まします乘給ふ馬鬃て此河に飛入り賴朝御落馬、それより相模川をあらため馬入川と云。なぞと言つてゐるが夫れは俗論だ、賴朝の出御したのは眞實であるが、冬深く天寒くて凜風に觸れ歸路についたとき、義經やら安德帝の偉靈に怖れて落馬したのが因て死んだのが眞實だ、今の橋も架換中に大正震災に遭つて、折角樹てた橋脚が滅茶になつた、と言つて昔物語を眞實のやうに吹聽したが、今の橋のある所とは違つてゐる、人口に膾炙する昔物語こそ的にならぬものは無い。

架橋の後十五年を經つた建曆二年修理されたことは明かであるが、幾年間此橋が存續したか判つてゐない。貞應年間の海道記は、相模川を渡ぬれば懷島に入る、砥上が原を出でゝ南のうらを見やれば、浪のあやおりはへて白き色をあらひ、北原をのぞめば草の綠そめなし淺黃さらせり。なぞと言つてゐるが、橋を渡つたものか渡船であつたか判らな

い、元弘三年新田義貞が鎌倉を攻めた頃には橋が無かつたものと見へ、川を渡らうとして渡守を待へてゐた所を殺された、東海道驛路の鈴の筆者が、渡守船に乘れと言ふ二人ともに打乘る。と言つてゐるやうに此頃やら彌次さん喜多さんの旅行した頃にはモー既に渡船だつたのぢや。

明治の御代となつて、其の八年、馬入の人秦某が長さ百間幅二間の假橋を架け、縣からも補助したさうだ、これで久し振りに橋が出來たのだが、十六年に之を架換へて長さ百二十間幅二間半のものに仕立てた、併し架橋に使つた一萬圓の償還に困つて通行人から渡錢をとつたが、二十二年東海道線鐵道が開通して、渡錢の收入が減つたときに橋は亦候流失してしまつた、その後は水のある所だけに假橋を設けて交通したが、四十二年神奈川縣の經營に移されて、本橋が出來たのを大正の御代に改造したのぢや。



現在の平塚

平塚

高見王（桓武天皇三代孫）子政子、東國ニ下向アリ、天安元年二月二十五日逝ス其ノ柩ヲ當所ニ埋メ、一堆の塚ヲ築テ印トス（今法要寺境内ニアリ）其塚上平カナルヨリ地名起レリ、とは新扁相模風土記が記してゐる、併し此こと土人の口碑に傳ふるのみと斷つてゐるから確かなことでないにしても、古いときから東海道宿驛の一つであつたこと は事實だ、建久の頃、曾我祐成の兄弟が父の仇工藤祐經

を討たうとして、此邊を徘徊したのは事實らしい、今の東海道沿にいろんな傳説を殘してゐる。昔から此處を通るもの此こを囃立てない者はない位だ。

東海道往還東西に貫く、幅四間一尺より六間に至る、とは之も風土記の言つてゐることだが、今は六間の所を見ることが出來ない、西行法師が、『高麗山や麓しげりて平塚の、里うち越てもろこしかはら』と詠んだ高麗山は、昔も今も變らない、少しは變つても可い東海道の道でさへも昔の儘に捨てられてゐる。

此處も亦大正震災に見舞はれて、家屋の倒れたのもあつた想だが、縣の計畫した震害地道路改良に反對して、西行法師時代――昔の儘で復舊したのが間違ひであつた。お隣りの新人、茅ケ崎は新らしいだけに、道路擴張に贊成して立派なものを拵へてゐるのに、古い歴史を持つ此處平塚だけは文化に惠まれない、獨り當時の町當局者だけを攻擊するのではないが、町一般の勢力も何こはなしに淋しい。

往昔の平塚

東海道改良の聲が隨分八ケ間敷こきに、自分の町内だけに立脚して國道の改良に反對するなんて、自覺のない町は東海道沿線から除いて、高麗山の裏側に隱居して貰つて町人は西行法師や鴨長明の詠んだ歌でも唱へて暮すが可い。

○

花水川に架つてゐる花水橋、昔の花水川は此處でなかつたらしいが、今は平塚町と大磯町の立會を流れてゐる、之に架けられたのが花水橋、餘り大きな橋ではないが、長さ四十間幅二十八尺の鐵筋混凝土桁橋で、大正十三年から五年に亙つて架けられた近代橋だ。

大磯

此里の虎は藪にも剛のもの
　おもしの石となりし貞節。
去りながら石になるとは無分別
　一つ蓮の上にや乘られぬ。

此處にも我國最初の讐討で萬世に名を殘した曾我兄弟に附きもの、虎女の名は、延臺寺に納つてゐる虎御石のある限り旅人の心を慰むるであらう。

道興准后の廻國雜記では、大磯の宿といふ所は、古へ虎と云へる好色の住みける所となん、ある同行に戯に申しきかせる、今は又とらふすのべとあれにけり、人はむかしの大いその里。と言つてゐる。林道春の丙辰紀行では曾我十郎の妾虎が舊跡に詠んで、十郎慷慨愛二於蒐一、血氣武人犀甲軀、妾婦當時誓レ星否、隕成二此石一似二望夫一、と言つたり井上通女の歸家日記は、大磯歌舞地　昔日各爭奸レ虎媛其殊絶　十郎亦偏憐　墮樓觀二石氏一　宴席殆二和田一　不二是時宗至一使二讎獨載レ天と言ひ壬戌覇旅漫餘は、祐成全盛大磯傳、千里高名虎御前、可レ嘆衣裳群豺鳥、只今有二出女如レ鳶と言つて嘶されてゐる。

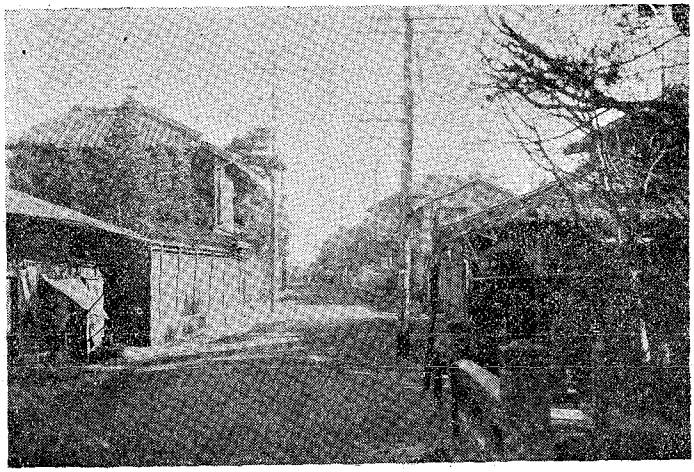
人の同情を惹く曾我十郎五郎の昔物語に出る虎御前も、時には遊女と言はれたのを憤慨した譯でもあるまいが、延臺寺の說明書きを觀ると、承安年間伏見大納言藤原實基卿年四十に餘つても嗣子がない、その妻夫れを嘆いて虎池辨財天に祈願したが、夢に告げを得て見れば今尊天の座す所に小石がある、之を日夜崇拜すると遂に安元元年女子を分娩した、此子を虎と名づけて寵愛養育したが、小石も虎女と同じやうに成長するのが不思議なので一祠を建て、夫れを祭つた、一方人間である虎女は成育し建久二年十七歳天

姿優艷であつたが、曾我兄弟復讐の計畫に誘はれて之に關係し、曾我兄弟が目的を達して富士野の露と消へてから「露とのみ消にし路を來て見れば尾花が末に秋風ぞふく」と詠て兄弟を祭つて嘉祿三年に死んだと言つてゐる、不思議な小石も祐成の兄弟が祐經にうたれんとするとき、矢を受け太刀を受けて身代りをしたのだ。彌次さん喜多さんのやうに、餘り茶化してばかりゐるのも藝でない。

○

こゝろなき身にもあはれは
去られけり
鳴たつ澤の秋のゆふくれ。

西行法師で有名な鳴たつ澤も、此處、大磯を物語つてゐる、之も昔から旅人の口に謳はれた、廻國雜記は哀れしる人の昔を思ひ出で、鳴立つ澤を泣く〳〵ぞこふ。と言つてゐる。何も夫れ程悲觀するに及ばないが、古人の風雅を眞似ていまのいら〳〵する人心を慰めたい、此有名な鳴立つ澤も今は哀れにも大磯町の下水道に化してゐる、唯た西行堂が下水の洗禮を受けてゐるのは、西行法師に氣の毒だ。



現在の大磯

○

大磯の東海道、――大磯宿は源平盛衰記や平家物語にも見えてゐるから古いときからの驛宿だ、磯濱づたひの宿であつたから夫れで宿名を附けたのだらう、新編相摸風土記は、土人傳へて今村の

北方字駒込橋邊より凡二町許り西に入り、宿裏直道にて愛宕御林裏通り東小磯妙大寺御嶽社前通り字池ノ下立野より西小磯村に通ずる野道あり是古海道なりと云。と記してゐるから今の東海道は昔とは違つてゐたのだ、が併し此處大磯は景色がよかつたらしい、海道記は、大磯の浦小磯の浦を遙々と來れば、雲のかけはし波の上に浮みて、鵲のわたし守あまつ空にあそぶ、あはれさびしき旅の空かな。ながめなれてや人は行くらん。大磯と小磯の浦のうち風にゆくとも知らずかへる神かな。と詠てゐる、今は富豪や特殊階級者が自然の濱地を占領して贅澤な別莊を築いてゐるが、昔は行人の眼を樂ましたものだ、言はゞ公衆の觀賞地だつたのだ、滄浪閣外水如、天と言つた春畝公の滄浪閣も亦此處にある、昔から景色はよかつたにしても道は惡かつたらしい、歸家日記も、沖より潮風の吹上げたるといふ、こまかなるいさご地にて、いと歩みかたげなり。と言つて女の旅に歩行難を訴へてゐる。大磯から先きは鐵道東海道線と並行して松並木の間を走るだけだ、廻國雜記が、たびごろも春まつ心はかはらねば聞くもなつかし梅澤の里。と詠んだ梅澤も、今は夫れ程ではない、國府津の町もつひ此間までは二間半位の東海道だつたが、震災のお蔭で九間半の幅に擴張され、生氣たつぷりの町勢を現はしてゐる

往昔の大磯